

クレアの詩学——ヴィジョンと現実の間で

鈴木 蓮 一

Hugh Haughtonは“... in his mature work he (Clare) evolves a poetics based on local knowledge, local detail, the thrill of individuation in the world beyond the individual”¹と指摘している。本稿では詩作に関する内省が顕著である主要な詩をとりあげて、クレアの詩学の特徴を考察する。

詩作と自己との関係の経緯を述べた「詩の成長」(‘The Progress of Ryhme’)に見られるように、「粗末な服を着た私にも／上流階級の人たちと同様、幸福になり、／詩を書く権利があるであろう」(I in humble dress / Might have a right to happiness / & sing as well as greater men, 107-9)²という考えがクレアの詩作の励みになっていた。階級を強く意識していたクレアは、幸福な生活と詩を書くことを社会的かつ政治的権利として主張している。この主張はクレアの詩全体における極めて重要な特徴である。この詩では、詩的靈感を擬人化し、‘poesy’と呼びかける。「しかし私がつぶやくか、または声を出してうたうとき、私のまわりに／詩的靈感はあのようなヴィジョンを投げ与えた」(But poesy that vision flung / Around me as I hummed or sung, 49-50)というように、‘poesy’は主体性をもった行為者として描かれる。「あのようなヴィジョン」とは、想像力が生み出す、自然の美しいイメージの世界である。「私は鳥や蜜蜂の旋律を熱心に聴き取り、／彼らの音楽を何度も詩に書いた」(I caught with eager ear the strain / & sung the music oer again, 141-2)という表現と、「今でも野や森はこの世のものではないほどすばらしい、／私の真の教師である」(& fields & woods are still as mine / Real teachers that are all divine, 145-6)という表現には、詩作技術の習得におけるクレアの階級意識がもた

らした屈折が見られる。「野原が私の詩歌の本質であった」(Fields were the essence of the song, 144)という表現にも、田舎の労働者階級の無教育と独学ゆえの屈折したクレアの自負が感じられないであろうか。「実在する」を含意するであろう“real”と、それとは対照的な“divine”は、自然の美しい事物がこの現実世界に存在すると同時に、想像力が見る永遠世界にも属することを暗示している。この二重性はクレアのすべての優れた自然詩の基本的な特質である。自然への愛と、詩作についての「直観力」(instinct, 143)はしだいに横溢し、「ついに詩的ヴィジョンが目覚め、／私をして詩を書きたくてたまらない状態にした。／そして詩においては、ささいな素描でさえ何気なく／自然の力と自然の魅力を物語っている」(Until the vision waked with time / & left me itching after rhyme / Where little pictures idly tells / Of natures powers & natures spells, 203-6)と述べる。これは、詩の第一義は詩人の内面よりも自然の力や魅力をうたうことであるという考えを暗示している。「耳目で感受される一つ一つの事物が／詩的靈感から楽園をつくった」(Each object to my ear & eye / Made paradise of poesy, 227-8)ということは、楽園を想起させる自然の事物こそが詩というものの内容であることを意味している。自然の力と魅力はクレアに詩作を促し、「ついに想像力は、私の心の友である詩のイメージを／私のそばに呼び出した」(Till fancy pictured standing bye / My hearts companion poesy, 267-8)というように、クレアにとっても想像力の働きは重要であった。

では、クレアは想像力の働きについてどう考えていたのか。「春の喜び」(‘Pleasures of Spring’)の一節に、自己の輝かしい夢を実現するために、ヒバリの翼を願望する人の描写がある。その人は日の光が降り注ぐ、穏やかな天空へと飛んでいき、「そこにある谷や山のように見えるもの」(the seeming vales & mountains there, 131)、すなわち幻想を追求する。その理由を次のように説明する。

For in the raptures of his warm delight
Mans reason keeps its wisdom out of sight

Leaving the sweets of fancy running wild
& half remains as he hath been a child (133-6)

人が歓喜に包まれて夢想するとき、理性はそれがもっている知恵が見えなくなり、想像力の喜びは限りなく美しい世界を生み出す。その時、理性そのものも半ば失われ、人はまるでこどものようになる。このような状態は、詩人の場合、想像力の過度の働きをもたらし、理性的な現実認識を不確かなものにしがちであるとクレアは説いている。この箇所には、シェリーの 'To a Skylark' への反応が見られる。シェリーがヒバリを「霊」(spirit)³ と呼びかけるのと同じく、見えない鳥であるハタクイナを表現するのにクレアも "spirit" という語を用いている。

Hunt where I would or listen as I might
Twas here & there & ever out of sight
A very spirit to my wandering thought
Heard on but never to be seen or caught (175-8)

ハタクイナの姿はいくら探す努力をしても見つからないので、この鳥はまさに見えない鳥であると結論する。"my wandering thought" はワーズワスの郭公である "a wandering Voice"⁴ を読者に思い出させる。クレアはこの鳥を探す努力を、なぜ強調しているのだろうか。そこには、ロンドンという都市に閉じ込められた、ロマン派詩人を含めた文学仲間における、生き物についての無知および注意深い自然観察の怠慢への非難が感じられる。これらの想像力が人間の内面に向けられる傾向をもつとは対照的に、クレアの想像力は精神の外の世界、すなわち生き物の生息地と、それらを取り巻く、激しく変動する政治経済の現象に向けられている。このことは、クレアの詩学の特徴である。

しかし同時に、クレアは内面に向かう想像力の働きの長所と価値を認めている。カエル、ヘビ、ツバメ、タゲリ、キツツキ、ハタクイナ、ヤマウズラの生態を描写した後、これらの生き物をつまらないものであると思い、春がもたらす「あらゆる夢のような美しいイメージ」を感受できない詩人たち

がにいるのに反し、「自然が居心地よい場所を見つける心をもっている詩人たちがいる」と言う。“there are some / Within whose bosom nature find[s] a home” (189 - 90) という表現では、自然が主体となっている。このことは、想像力による自然への一方的な過度の働きかけは抑制されるべきである、というクレアの考えを示す。詩人の想像力と自然界の事実の関係についてクレアは興味深い一節を書いている。

A naturalist must not always look into a poets fanciful descriptions for facts for when the poet happens to fall in love with a pastoral chloe <or> Phillis &c the devoted nightingale is addressd by them as a lover also <& of> course their songs like those of the poets are to be made up of hop(es) & <wishes> &c to its featherd Phillises & chloes if the poets mistress frown on his pastoral why then to be sure the poor nightingales mistress must frown likewise & its song must spring from dissappointments & sorr(ows) be melancholy of course cloud must obs[c]ure the sun & tempests discomfort the landscape but if his mistress happen to smile why then all nature is told to be gay & flourishing these are the expanses of fancy & in poetry they are all very well but nature is not so changable she cares as much for the poets invoctaions [sic] & his mistress as the weather does for an almanack⁵

この一節でクレアは、詩人たちが牧歌の世界に恋しているならば、彼らの詩は「希望や願望」によって構成され、詩の中の「すべての自然」は「陽気で華やかな」ものになるし、また反対に「失望や悲しみ」から生じた詩においては、「風景」は「憂鬱な」ものになると、つまり、詩人の想像力と気分しだいで詩の中の自然は変化するが、現実世界の自然は靈感を求める詩人の祈願やミューズには関心がなく、それらの影響はあまり受けないと言う。この言説は、ロマン派詩人たちにおいて人間精神が主体的であり過ぎたことに対する反動、あるいはレジスタンスである。だが、クレアの場合においても、想像力の働きの長所は、詩人をして歓喜のうちに、「この世ならぬ、すばらしいヴィジョン」、すなわちエデンの園を見させることである。この点については、「クレアはしばしば、永遠性への洞察として自然の様相を見ていた」

こと及び、クレアが「個別の観察の中に一般的真理がひそむ」詩を書いたことを指摘しておきたい。⁴

自然は詩人の精神作用によって影響を受けるべきではないという考え方は、「転居」(‘The Flitting’)の中の「私の心に、その心自身のものではない歓喜を／吹き込んだのは自然の美であった」(Twas nature's beauty that inspired / My heart with raptures not its own, 117-8)という考え方と通底している。自然の事物は人間精神から独立した存在であることが尊重されねばならない、とクレアは考える。人間精神が主体ではなく、人間の心に歓喜を与える自然が主体的な存在である。同様な考えは、「様々な識別力」(‘Shadows of Taste’)の中の「そこでは(詩においては)自然は、事物がもつすべての喜びと本質において／その美を人間の魂の上に投げ与える」(There nature o'er the soul her beauty flings / In all the sweets and essences of things, 59-60)にも窺われる。また「牧歌」(‘Pastoral Poesy’)の冒頭で、詩を定義し、「真の詩的靈感は言葉の中にあるのではなく、／様々な思いを表わすイメージの中にあり、／それらのイメージによってもっとも素朴な人びとさえも感動させられ、気高い幸福を感じる」(True poesy is not in words / But images that thoughts express / By which the simplest hearts are stirred / To elevated happiness, 1-4)と、さらに、「(詩は)すべての人に様々な感情を伝える、／いつまでも新鮮な言葉である。／サンザシの花がそれを見るすべての人の心に／すぐに五月を感じさせるように」([Poetry is] A language that is ever green / That feelings unto all impart / As awthorn blossoms soon as seen / Give may to every heart, 13-6)と言う。そして「事物のイメージが人の心にもたらされ、／そこでは幸福な気分が／想像力について考えないことをのんきに楽しみ、／溢れる喜びを経験する」(An image to the mind is brought / Where happiness enjoys / An easy thoughtlessness of thought / & meets excess of joys, 25-8)と言う。“thoughtlessness of thought”という表現は、想像力を働かせ、言葉を用いてつくられるイメージのことは考えない状態を意味している。自然が人の心に与えるイメージには人間的な要素、すなわち人間中心的な想像力というべきものがないからこそ、人はそのイメー

ジを大変楽しいものであると感じる。詩においては、自然の事物がそれ自身のものもとして持っている価値や本質が重視されねばならない、とクレアは主張する。

「転居」には、詩の女神についてかなりの言及がある。ミューズは“native poesy”、すなわち生まれ育った場所についての詩を書くときクレアは言う。しかしクレアの詩は書かれた場所の個別性・特殊性を超えて、一般性・普遍性を表わしている。「私は…根がからまったカワヤナギの大枝の上に／隠遁者であるアカライチョウのスゲで作られた巣を見つけて、／歓喜するミューズを愛する」(I love the muse ... who ... feels a rapture in her breast / Upon their root-fringed grains to mark / A hermit morehens sedgy nest, 163-71) における“mark”は、詩人が自然を注意深く観察することの重要性を説いている。また、「…生垣の切れ目のところで立ちどまり、／詩歌を賞賛するふりをし、／一生を通じて野の花が成長するのを、／または森の老木をけっして注意深く見ることのない、／うわべだけの態度をとらないミューズを私は愛する」(I love the muse ... / Who ... pauses by the hedgrow gap / Not with that affectation praise / Of song to sing & never see / A field flower grow in all her days / Or een a forests aged tree, 177-84) における“with that affectation”という語句は、詩が叙述すべき自然の事物についての本物の知識と本物の情動を伴わない、装った、見せかけの態度を意味する。そしてこの語句によってクレアは、ワーズワスの詩に感じた「彼の素朴さを装った態度」(his affectations of simplicity)⁷のことをあてこずっているようだ。さらに、「私はときどきあらゆる雑草とあらゆる生き物への愛と喜びを感じる」(I feel at times a love & joy / For every weed & every thing, 189-90) には、“weed”が象徴するすべての民衆と生き物への愛が暗示されている。したがって、このような愛と喜びの感情は、クレアの政治的平等主義、下層階級の人々への連帯意識、他の生き物との共生意識を表わすものである。

「転居」では、崇高についてのクレアの考え方が窺われる。ミューズが「黄金の弦を爪弾く」ような「尊大で誇示的な」詩歌では、都市における名声と想像の世界が広がり、「華麗なものが崇高なものとして通っている」

(splendour passes for sublime, 156) と感じたクレアは、「崇高の感情は／地味な、ありふれた事物に属する」(passions of sublimity / Belong to plain & simpler things, 77-8) と反論する。ダビデの時代から今日まで存在し続ける「苔」は自然の永遠性を象徴している。崇高なものはこのような永遠なる自然の事物の中にある。それゆえ、永遠なる自然の事物を叙述することが詩の本質である、と考えたクレアは、美しい自然のイメージが詩の中で真実のように永遠に存在するためには、詩人はどのような態度で詩を書くべきかを思索する。

「様々な識別力」('Shadows of Taste') では、John Donne と Alexander Pope の詩を例に挙げて、流行によって詩の文体は様々に変化すると述べた後、流行を超越し、永く後世に残る詩文において、「生き写しの表現や息づくような言葉で／詩集のページに書き留められた心地よいイメージは／聞かれ、触れられ、見られる風景となる」(A pleasing image to its page conferred / In living character & breathing word / Becomes a landscape heard & felt & seen, 71-3) と言う。その風景のイメージは「真に崇高なものとしての迫真性」(truth to nature as the true sublime, 77) によって可能になる、とクレアは言う。このような信念に基づいて、クレアは自然の事物を、それ自体の価値と本質を表現するために、自然科学的な観察態度でリアリスティックに描写する。クレアの詩におけるリアリズムは、生き物の生息地を重要視する彼のエコロジー的自然観と繋がっている。歓喜の状態において、詩人は「自然がもつ原初のエデン」(Natures wild Eden, 126) を想像することを好む。自然の事物の中に、エデンの園として「美の世界」(a world of beauty, 127) を生み出す働きをもつ詩人の想像力は、同時に、生態学的様相を活写するリアリズムの働きをもっている。この詩には次のような一節がある。

He loves not flowers because they shed perfumes
Or butterflies alone for painted plumes
Or birds for singing although sweet it be
But he doth love the wild & meadow lea
There hath the flower its dwelling place & there

The butterfly goes dancing through the air
 He loves each desolate neglected spot
 That seems in labours hurry left forgot (135-42)

詩人は、「芳香」、「彩られた翅」、「鳴くこと」ゆえにのみ花、蝶、鳥を愛するのではなく、それらの「住む場所」、すなわち生息地ゆえにそれら生き物を愛する。「囲い込み」の作業において、労働者が急いだため、「放置され、荒れた場所」を詩人は愛する。詩人に当てられる 'taste' というクレアの用語は、識別または選択しながら生息地の詩的ヴィジョンを創り出す想像力を意味している。

「こどもの時代」('Childhood') の中で、「有頂天になっているこういったときに、／私たちの虚栄心は理性へとしりごみすることはなかった」(Our pride to reason would not shrink / In these exalted hours, 105-6) し、「あの頃、想像の世界は真実であった」(fancy then was true, 110) と述べ、クレアは想像力を賛美している。だが、「おお、真実を見る眼を覆い隠してしまう／想像力がつくりだす至福の状態はなんと心地よいことか」(O sweet the bliss which fancy feigns / To hide the eyes of truth, 405-6) という詩行において、想像力の働きには真実を見えなくする要素が付随するというクレアの認識が読みとれる。こどもからおとなへの成長は、現実世界をエデンのヴィジョンとして見る詩人の想像力の働きを衰退させるとクレアは考える。「衰退、あるバラッド」('Decay A Ballad') において、詩心は衰退し、もはや想像力が生むヴィジョンに相応しいものではなく、「自然自身が逃げていくように思われる」(Nature herself seems on the flitting, 4) と言う。さらに "Ah cruel time to undecieve us" (44) と、われわれをヴィジョンから目覚めさせる《時間》の影響力の残酷さを嘆く。だが、「そうだ、詩心は消え去った。／そして想像力が生み出すヴィジョンは私たちをそこから覚まさせる」(Aye poesy hath passed away / & fancys visions undecieve us, 61-2) と、また「つかの間の幻想を失うことは、なぜ私たちを悲しませねばならないのか」(why should passing shadows grieve us, 64) と言う。"undecieve us" は、われわれを想像的

真理から解放するという意味である。詩心の消滅によって、想像力によるヴィジョンは私たちを思い違いから解放する。クレアは想像力によるヴィジョンを十分経験したがゆえに、なぜ“passing shadows”の喪失を悲しまねばならないのかと、疑問を呈しているようだ。この疑問は、喜びを与えてくれた想像力の衰退を嘆くものであると解釈できるが、幻影を生み出す想像力の限界を見極めた後、その衰退を嘆く必要はないという主張であるとも解釈できる。また“undecieve”という語はキーツの‘Ode to a Nightingale’の“Adieu! the fancy cannot cheat so well / As she is fam'd to do, deceiving elf.” (73-4)⁸への反応であると思われる。想像力とその世界の喪失にたいし、キーツは失望と未練を表わしているようだが、クレアはそれらの喪失の嘆きと同時に、それらの喪失の肯定または是認を表わしている。⁹

「詩の永遠性」(“Songs Eternity”)では、想像の世界に耽る夢想家たちに向かって、「夢想家たちよ、ミツバチの羽音に耳を傾けなさい。／アダムとイヴのために／うたわれていた歓喜の歌を／アオガラがツーツル・ティと／うたっている樹をよく見なさい」(Dreamers list the honey bee / Mark the tree / Where the blue cap tootle tee / Sings a glee / Sung to adam & to eve, 31-5)と、生き物の生態を注意深く観察するように説得している。ここには、他のロマン派の詩人たちにたいする皮肉が込められている。

次にクレアの「鳥の詩」の象徴的、暗示的な意味を探ってみたい。「ナイティンゲールのことを書くことにおいて、クレアは避けがたく詩のことを書いていた」¹⁰と Haughton は指摘している。「ナイティンゲールの巣」(‘The Nightingales Nest’)の中の、「しばしば彼女の翼は歓喜してうちふるえ、／羽根はいわば喜びのために逆立っていたし、／むせぶようにうたう歌をその胸から解き放つために／口は大きく開いていた…」(Her wings would tremble in her extacy / & feathers stand on end as 't'were with joy / & mouth wide open to release her heart / Of its out sobbing songs ..., 22-5)という詩行において、想像力の働きによって生じた“extacy”や“joy”という表現が、リアリズムから生じた“tremble”、“feathers stand on end”、“mouth wide open”という表現と並置され、ヴィジョンと現実

が並存している。だが、その後の、「しかし私が茂みに触れるか、またはほんのちょっとでも動くと…／あの内気な鳥はハシバミの茂みをすでに去っていて、／ふたたびうたいはじめるために少し離れたところに隠れていた」(But if I touched a bush or scarcely stirred ... / The timid bird had left the hazel bush / & at a distance hid to sing again, 28-31) における“timid”と“hid”の二語によって、クレアは想像力の働きの意義を認めてはいるものの、リアリズムを志向していることがわかる。「—この鳥はなんと賢いのだろう。彼女はさっと飛び出し、／危険が近くにあることを表わす悲しい歌をうたった。そして私たちが彼女の巣に／近づいた今、彼女は突然鳴きやんだ—自分の家の在処をうっかり／もらすかもしれない恐怖心をまるで押し殺しているかのように」(—How subtle is the bird she started out / & raised a plaintive note of danger nigh ... & now near / Her nest she sudden stops—as choaking fear / That might betray her home ..., 57-61) という、この鳥の生態の客観的描出はこのリアリズムに基づいている。“clever”を意味する“subtle”という語は危険を察知し、生き残りのために巣をまもる能力を示している。このような能力があるからこそ、この鳥は“hidden”であり、“unseen”である。“a plaintive note”と“fear”はこの鳥の感情を表わしている。瞠目すべきことは、この鳥が想像力の産物としてではなく、人間との関係の中で現実にいる存在として、その環境とともに叙述されていることである。このように見てくると、「ナイティンゲールの巣」はクレアの詩学を表象する重要な詩である。

この詩における「無知な男の子たちが覗き見ようとは思わない場所に、／彼らは巣をつくる」(Theyll build where rude boys never think to look, 52) の“rude boys”はキーツやシェリーを暗示しているであろう。「ヒバリ」(‘The Sky Lark’) において、「こんな鳥のように翼をもつことができるなら、／自分たち自身、誇りがあまりにも高くなり過ぎて、／天国に苦痛や重労働がないのと同じように、／危険のない、流れる雲の上のほかはどこにも巣をつくらないだろう—雲の上に巣をつくり、聞いたことや見たことのない場所へと世界中を飛びまわるだろう—ああ、鳥であつたらなあ」(had they the wing / Like such a bird themselves would be too proud

/& build on nothing but a passing cloud / As free from danger as the heavens are free / From pain & toil—there would they build & be /& sail about the world to scenes unheard / Of & unseen—O where* they but a bird, 20-6, *were) と男の子たちは想像する。彼らは自然に対して「不注意で」(unheeding, 17)あり、この鳥の生態を知ろうとしないし、雲の上に巣をつくることは荒唐無稽であるとクレアは考える。この引用箇所、ロマン派詩人たちが地上における「苦痛や重労働」を強いられた労働者の実態を直視せず、砂上の楼閣のような理想主義的幻想を抱いているとクレアは考え、彼らを暗に揶揄しているのではないか。「危険のない、流れる雲の上」である天上界を夢見る男の子たちに喩えられたロマン派詩人たちが、人間の搾取と自然の収奪が行われている現実を等閑にしていることをクレアはほのめかしている。男の子たちは、まさに「笑い、想像し、通り過ぎていく」(smile & fancy & so pass along, 28) ののである。

さて、鳥とその叙述についてクレアはどのように考えていたか。「アカライチョウの巣」(“The Moorehens Nest”) の “less beloved for singing then* the taste / They have to choose such homes upon the waste / Rich architects—& then* the spots to see / How picturesque their dwellings make them be”(43-6, *than) という詩行に見られるように、クレアが鳥を愛する理由は、その鳴く声よりも、鳥がもっている、巣をつくるための「識別力」(taste) であり、鳥の巣によって非常にピクチャレスクになっている場所であると言う。クレアが生き物の “taste” とその生息地を描出するのは、その場所が生き物と環境の調和を表わしているとクレアが知覚したからである。クレアが生息地としての鳥の巣に焦点を合わせているのは、「詩人の精神がつくる途方もない物語は、／それらの話のために、鳥たちの住処よりも魅力的なイメージを見出せない」(The wild romances of the poets mind / No sweeter pictures for their tales can find, 47-8) が示すように、鳥の巣は詩人の想像力が生み出すイメージよりも美しいと知覚したからである。ここでもクレアは、人間中心主義に対置される事物中心主義とよぶべき思想を提示している。

詩作において想像力が生み出すヴィジョンよりも外界の自然を重視するク

レアは、「キアオジの巣」('The Yellowhammers Nest')において、詩の本質は人間精神の中ではなく、自然の中に存在すると主張する。

—Five eggs pen-scribbled over lilac shells
 Resembling writing scrawls which fancy reads
 As natures poesy & pastoral spells
 They are the yellow hammers & she dwells
 A poet-like—where brooks & flowery weeds
 As sweet as Castaly to fancy seems
 & that old molehill like as parnass hill
 On which her partner haply sits & dreams
 Oer all his joy of song—so leave it still
 A happy home of sunshine flowers & streams (13-22)

ライラック色の卵の殻の上に走り書きのようなものが見える。想像力はその走り書きのようなものを自然詩や牧歌だと解釈する。想像力にとって、この鳥の卵における小川や花をつけた雑草は美しいカスタリアのように、また古いモグラ塚は、たぶんその上にこの鳥の連れ合いが止まり、詩歌のすべての喜びを夢想するパルナッソス山のように思われる。この鳥はミューズに靈感を吹き込まれ、卵の殻に自然詩や牧歌を書く詩人のようだと想像される。「それらの卵はキアオジの所有物である」(They are the yellow hammers)という表現は、詩は想像力が書くものではなく、自然が書くものであること、換言すれば、詩の叙述の対象は人間の内面世界ではなく、実在する自然の事物や生き物であることを暗示している。それゆえ、クレアは自然の事物や生き物の存在と存続を象徴するこの鳥の「楽しい家」である生息地の安全を願い、鳥の巣を自らの詩に描出することによって、実在する自然を永遠化しようとしている。

「コマドリの巣」('The Robins Nest')において、鳥の巣の環境と、「囲い込み」という開発によってそれを破壊しようとする人間の経済行為の関係についての洞察を、クレアは次のように端的に表現している。

... the wild
Where old neglect lives patron & befriends
Their homes with safety's wildness—where nought lends
A hand to injure—root up or disturb
The things of this old place—there is no curb
Of interest industry or slavish gain
To war with nature . . . (49-55)

太古からの、自然のままの場所の動・植物を「根こそぎにするか、侵害する」のものは人間である。そして、「自然と戦争している、／利益を追求する産業または卑しい利得には／抑制がない」という詩行はクレアのエコロジー的自然観の真髓を象徴するものであろう。人間は自然科学的な見方を重視しながら、生き物の生態系と、それを破壊する産業主義との関係を考察し、政治経済を視野に入れながら、その調和した関係を回復すべきであることを、クレアはこの引用箇所によって示唆しているのではないか。

クレアの詩学についての要点は、①土地の伝統、方言、特殊性を重視する②ロマン派の崇高、抽象、超越への内面化された探求に対して抵抗を表現し、風景がもつ具体的な歴史的状況についての自らの認識を反映する¹¹ ③想像力の過度の働きが生み出すヴィジョンを拒否し、外界の事物への注意を読者に喚起する④リアリズムで描写した自然の事物の細部に、想像力が捉えたエデンとしての「彼の永遠の真理の世界」の象徴的意味をもたせる、と言えよう。¹²

注

1. Hugh Haughton, 'Progress and Rhyme: 'The Nightingale's Nest' and Romantic poetry' in *John Clare in Context*, eds. Hugh Haughton, Adam Phillips, and Geoffrey Summerfield (Cambridge U. P., 1994), p. 53.
2. クレアの詩の引用はすべて Eric Robinson, David Powell, and P. M. S. Dawson eds., *John Clare Poems of The Middle Period 1822-1837*, Volume III, IV, V (Oxford U. P., 1998, 2003) に拠る。
3. Roger Ingpen and Walter E. Peck eds., *The Complete Works of Percy Bysshe Shelley*, Volume II (New York: Gordian Press, 1965), p. 302.
4. Stephen Gill ed., *The Oxford Authors: William Wordsworth* (Oxford U. P., 1984), p. 245.
5. P. M. S. Dawson, 'Of Birds and Bards: Clare and His Romantic Contemporaries' in *John Clare: New Approaches*, eds. John Goodridge and Simon Kövesi (The John Clare Society, 2000), p. 155.
6. Kelsey Thornton, 'The Transparency of Clare' in *The John Clare Society Journal*, Number 21 (2002), pp. 74, 79.
7. Mark Storey ed., *The Letters of John Clare* (Oxford U. P., 1985), p. 231.
8. H. W. Garrod ed., *Oxford Standard Authors: Keats Poetical Works* (Oxford U. P., 1967), p. 209.
9. Thornton は 'The Complexity of John Clare' in *John Clare A Bicentenary Celebration*, ed. Richard Foulkes (University of Leicester, 1991) において、クレアの楽園喪失について、"His poetry is left to lament the loss of Eden and loss of his visionary ability to reconstruct it. No longer the detail of the natural scene—just tokens of loss. But we are not left with simple nostalgia, a naïve transparency depicting a longing for lost youth; rather we have again what Clare so remarkably achieves: a complex notion of the interrelationship of the physical world and the mind which is comprehending it." (p. 53) という示唆に富むコメントをしている。
10. Haughton, p. 55.
11. See James McKusick, 'Beyond the Visionary Company: John Clare's resistance to Romanticism' in *John Clare in Context*, p. 223.
12. See Thornton, 'The Complexity of John Clare', p. 51. また、"It is the general pattern of Clare's thought that he should focus on a small aspect of the natural world and make it into a representative or symbol of the eternal world, or perhaps one could say, use it as a window through which to 'see into the life of things'." ('The Transparency of Clare', p. 76) という Thornton の指摘は重要である。

Clare's Poetics: Between Vision and Reality

Ren-ichi Suzuki

Abstract

According to Hugh Haughton, Clare "evolves a poetics based on local knowledge, local detail, the thrill of individuation in the world beyond the individual". In 'The Progress of Ryhme', Clare indicates by means of the words "real" and "divine" that the beautiful which exists in this world belongs, at the same time, to the vision of the eternal world. In 'Pleasures of Spring', his imagination deals with the outer world, especially wildlife's habitats and social and political phenomena, while the imaginations of other romantic poets tend to be directed to their inner world. In 'Pastoral Poesy', Clare defines poetry and says, "True poetry is not in words / But images that thoughts express / By which the simplest hearts are stirred / To elevated happiness". This definition seems to mean that poetry should not be created by anthropocentric imagination, but by one which makes much of living things and their own worth and nature.

In 'The Flitting' Clare writes, "I feel at times a love & joy / For every weed & every thing". "Weed" symbolizes the common people, and "thing" symbolizes a living thing. Therefore, these lines imply Clare's political egalitarianism and his sense of solidarity with the common people, along with his sense of symbiosis. In 'Shadows of Taste', he believes that "a pleasing image" can only be made by "truth to nature as the true sublime". Based on this belief, Clare describes natural things realistically in order to express their own worth and intrinsic qualities. His realism leads to an ecological view of nature, with which he concentrates on habitat. 'Decay A Ballad' shows not only his grief for the loss of poetic vision, but also his approval of that loss because of "passing shadows" that are created by imagination.

Clare persuades the romantic poets to observe carefully wildlife and its ecosystem in 'Songs Eternity', saying, "Dreamers list the honey bee / Mark the tree". In 'The Nightingales Nest', while imagination creates the words "extacy" and "joy", and realism creates "tremble" and "mouth wide open". Although Clare appreciates imagination in the making of poetry, he denies the vision created by its excessive works, considering realism more important. It is remarkable that the nightingale is described as living together with its surroundings in the real world, not as an imaginary vision. In 'The Sky Lark', the boys are symbolic of the romantic poets who are "unheeding" to nature. Clare seems to ridicule their ignorance of the common people's real condition full of "pain and toil". 'The Moorehens Nest' shows that Clare loves birds for their "taste" and habitat. He

perceives that birds are in harmony with their environment, and that, for this reason, habitat is "picturesque". In 'The Yellowhammers Nest', Clare suggests that the subject of poetic description should not be the world of the human mind but that of nature and wildlife. In 'The Robins Nest', he suggests that we should consider the relation between wildlife with its environment and the industrial society which has been destroying it.

The main points of Clare's poetics are as follows: Clare admires the tradition of realism in the English pastoral and makes much of locality and dialect. This indicates Clare's resistance to the romantic conceptions of sublimity, abstraction, and transcendence, and suggests that his poetry reflects his own recognition of the concrete and historical circumstances, which is, in a way, in contrast to the internalized quests of the romantic poets. At the same time, Clare expresses a symbolic meaning of "his world of eternal truth" as an Eden in the details of the natural things that he describes.